内陸からの再起 ふるさとを胸に ―⑤

陸前高田市から盛岡市に避難 佐藤　明さん

夫婦共に新たな一歩

はまなす鍼灸治療院を再開した佐藤明さん（中央）と妻典子さん（右後ろ）。二人三脚で再起を誓う＝盛岡市緑が丘3丁目

いわて　東日本大震災

「はまなす鍼灸（しんきゅう）治療院」盛岡市緑が丘の住宅地に、東日本大震災の津波を耐え抜いた看板が立つ。

陸前高田市米崎町で被災した院長佐藤明さん(54)一家は、同市や西和賀町で1カ月半、避難生活を送った後、盛岡市で新生活を始めた。

心身ほぐす

「お茶はいかがですか」。妻典子さん(56)が受付で患者に語りかける。治療前に心をほぐす大切な時間。治療室では心地よい音楽の中、明さんが患者の体をほぐす。古里で1994年に開業して以来、二人三脚で歩んできた。

毎週訪れる滝沢村滝沢の上野ムツさん(75)は「先生の手は魔法の手。身も心も軽くなって帰れる。奥さんと話すのも楽しみ」と笑顔を見せる。

昨年3月11日、翌日の卒業式の練習のため中学校にいた次男智行さん(16)を除き、家族全員、海から約200メートルしか離れていない自宅にいた。

激しい揺れと停電。「絶対に大津波が来る」。氷上山麓の公民館に避難し、夜には智行さんが合流した。

震災後数日は、がれきに阻まれ家を見に行くことさえできなかった。1週間後に再び訪れると、自宅と治療院は流失。基礎のコンクリートと看板だけが残っていた。

家族全員、無事だったが、高校入学を控えた息子と高齢の両親がいる。家族を守るためにどうするべきか、先は見えない。「早く日常を取り戻したい」という一心だった。

仲間の誘い

そんな中、同業の仲間から「盛岡に来たらどうですか」と誘われた。考えたこともなかったが、一筋の光が差したように感じた。

西和賀町の温泉に避難して準備を整え、自宅兼治療院の2階建て住宅を借り、同年5月28日に開業。津波に耐えた看板をしっかりと立てた。高田高に合格していた智行さんは、盛岡三高に転入が認められ、新しい暮らしに希望が見えた。

生活がある程度落ち着いた同年8月、家とともに流された結婚式の写真が舞い戻った。ボランティアによってきれいに泥を落とされた写真。知人が避難所で見つけ届けてくれた。うれしかった。典子さんは「また二人で頑張りなさいということなんだ」と思った。

二人は明さんの修業先の東京で出会った。患者だった典子さんと施術する明さん。同郷の二人の仲は急速に縮まり、結婚。長男渉さん(29)と共に陸前高田市の年老いた両親の元に戻り、念願の開業を果たした。

「はまなすの先生」と親しまれ、大船渡市や住田町からも患者が来た。今でも気仙地域から片道3時間かけて通ってくれる人々がいる。明さんは「やる気に燃えていた当時の気持ちを思い出した。原点に戻った気持ち」と感謝する。

「陸前高田に戻りたい気持ちはある。だけど今はその気持ちを封印して、ここで頑張る」と明さん。いつかまた、故郷で「はまなすの先生」と呼ばれる日を夢見て、家族と共に盛岡の地から新たな一歩を歩みだした。

（文・写真、小野寺真穂）

津波に流されたが、ボランティアらにより舞い戻った結婚式の写真。汚れがひどく、一部消えてしまったものもあるが、二人にとっては宝物だ

応援メッセージ　再開へ決断力すごい

大船渡市立根町　大船渡、陸前高田の両市にあった治療院が被災した　古水健吾さん(54)

佐藤さんとは10年以上の付き合いで、よく仕事の話をしていた。明るく勉強家で、リーダーシップのある人。震災後、盛岡に行く決意をし、すぐに仕事を始めようとした決断力はすごい。

自分も今は住田町で診療を続けており、大船渡市と陸前高田市の治療院も再開に向けて準備を進めているところだ。今も「はまなす鍼灸治療院」の看板を使っていると聞いた。ハマナスは高田松原で咲く花。陸前高田市のみんなが、それぞれの場所で頑張っているというアピールにもなる。またいつか、陸前高田市で一緒に仕事をしたい。

被災沿線を元気に

三陸鉄道が復活目指しPR　レール販売、ツアー好評

東日本大震災で甚大な被害が出た三陸鉄道（宮古市）。沿岸部を走る全線の3分の2が不通のままとなっているが、被災したレールや新商品を販売するなど、あの手この手で復興機運を盛り上げる。「三鉄を中心に地域を元気にしたい」。全国の鉄道ファンの根強い支持にも助けられ、2014年4月までの全線開通を目指している。

▼ファンの助け

「頑張れ！三陸鉄道」「笑顔をつなぐ　ずっと…」。部分運行している車両の内装には三陸鉄道のキャラクター「久慈ありす」を描いた絵や応援メッセージが並ぶ。「震災後、全国の三鉄ファンが送ってきてくれました」。望月正彦社長は顔をほころばせた。

三陸鉄道は総延長約108キロで、久慈―宮古間の北リアス線と釜石―盛間の南リアス線に分かれる。地域住民の生活を支える「足」であり、風光明媚な三陸海岸の景色を楽しめるローカル線として関西方面から団体客が訪れるほどの人気だった。

しかし震災の津波で、計約5・8キロの線路が流失。南リアス線は全線不通のまま、北リアス線の一部区間で運行している。月間の運賃収入は700万～800万円と震災前の約4分の1に落ち込んだ。

「ただ支援を待つだけでなく、震災復興の機運づくりに」と、5月から自治体の職員らを対象に、社員がガイドを務める被災地視察ツアーを開始した。6月には復興祈念の新商品「きっと芽がでるせんべい」を販売。さらに8月には被災したレールを長さ5センチ、10センチに切断し、200個限定でモニュメントとして売り出した。

いずれも好評で、ツアーはこれまでに約100団体1500人以上が参加。せんべいも全国から注文が殺到し、生産が間に合わない状況に。レールは販売翌日に完売した。「たくさんの応援をいただいて、ありがたかった」と望月社長。

▼企業の支援も

企業からの支援もある。車両の前面につけるヘッドマークのオーナーに、俳優杉良太郎さんの事務所など8社がなり、1社当たり年間30万円の契約料を拠出した。

望月社長は「元に戻すだけではなく、人を呼び込めるような魅力ある鉄道にならなければいけない」と目標を語る。

今年4月に青森県側の北リアス線の部分運行区間が延びるのに伴い、JR八戸線の列車を乗り入れるようにJRと交渉。社員ガイドによる被災地視察ツアーは、修学旅行や体験学習に利用してもらうため、県外にPRしていく方針だ。

三陸鉄道の車両内に張られたファンからのイラストについて説明する望月正彦社長＝宮古市

三陸鉄道の運行状況

「一部」「全戸」移転を併記

宮古・田老の住民組織

まちづくり素案決定

意見集め来月復興計画

住民組織の宮古市田老地区復興まちづくり検討会（加藤伸一会長）は5日、市田老総合事務所で開かれ、同地区の復興まちづくり計画素案がまとまった。意見が割れた住宅移転は、浸水区域などの住宅を対象とする一部移転案と、浸水していない地域も含めた全戸移転案の「両論併記」で決着。今後、素案に住民の意見を反映させた上で拡大会合に諮り、2月中に計画を決定する。

さまざまな意見が出された田老地区復興まちづくり検討会

委員25人のうち23人が出席。移転対象や移転先、非居住地の土地利用など項目ごとに意見を出し合った。

意見が分かれた住宅移転はメーンを一部移転案としながら、全戸移転案も併記。三陸鉄道田老駅は現位置とする。

かさ上げや高台移転後の住宅建設は、2016年度の着手を目標とする。

素案は昨年12月21日の第3回会合で作成予定だったが、まとまらず今回、追加会を開催し決定にこぎ着けた。

今後は今月14～17日に同事務所で同素案を公開。検討会は1月30日に開く第4回会合で住民意見を集約し住宅移転などについてさらに詰めた上で、拡大会合を開催し計画を決定。その後に計画を市長に提言する。

大漁旗で義援金呼び掛け

東京・大橋氷川神社　浜登さん（山田出身）飾る

山田町船越田ノ浜出身の浜登鉄男さん(81)＝東京都目黒区大橋＝は、氏子総代を務める目黒区の大橋氷川神社に大漁旗21枚を飾り、初詣客に東日本大震災の義援金を呼び掛けている。津波で弟夫婦をはじめ一族の人々を亡くし、翻る大漁旗に古里再生の思いを託す。

浜登さんは震災後、地元集落の惨状を見て、犠牲者を弔うとともに「古里のために何かできることを」と考えた。親類で船主の菊地克己さん(70)が漁船「宝重丸」で沖に避難して津波から助かった話を聞き、縁起がいい船の大漁旗を借用することにした。

旗は元日に鳥居2カ所に取り付け、初詣の期間中飾る。義援金の協力者には「絆がんばろう」と縫い込んだお守りを進呈。昨年の夏祭りでも寄付を募り、約20万円が集まった。

大漁旗は漁船新造の際、親類らが進水祝いとして船主に贈る。寄贈者の中には震災で亡くなった人もいるが、浜登さんは「きっと天国から見てほほ笑んでくれている」と信じる。

はためく「宝重丸」の大漁旗を見つめる浜登鉄男さん（左下）

～被災者からのメッセージ～

高台へ住居移したい

宮古市田老のグリーンピア三陸みやこの仮設住宅で生活　佐々木ミサ子さん(66)

震災発生後、腰痛がひどくなった。今は近くの田老サポートセンターで電気をしたり、マッサージ機を使って痛みを和らげている。そこで、友人と、お茶やコーヒーを飲みながらおしゃべりをするのが楽しみだ。あの波を見たら、元の場所に住みたくない。でも田老から出たくない。高台に移動したい。

少しでも復興の役に

紫波町平沢　及川　久さん(68)

大船渡市三陸町越喜来で被災し、紫波町に移住した。震災後は避難所の責任者もしたが、病気もあり、疲れ切った。地元で復旧、復興に役立ちたかったし、古里を離れるのは本当につらかった。今はもりおか復興支援センターで物資の仕分けを手伝っている。きょうは少しでも誰かの役に立ったかな―。帰宅中、毎日そう考える。

津波てんでんこ

題字・山下文男さん

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。